

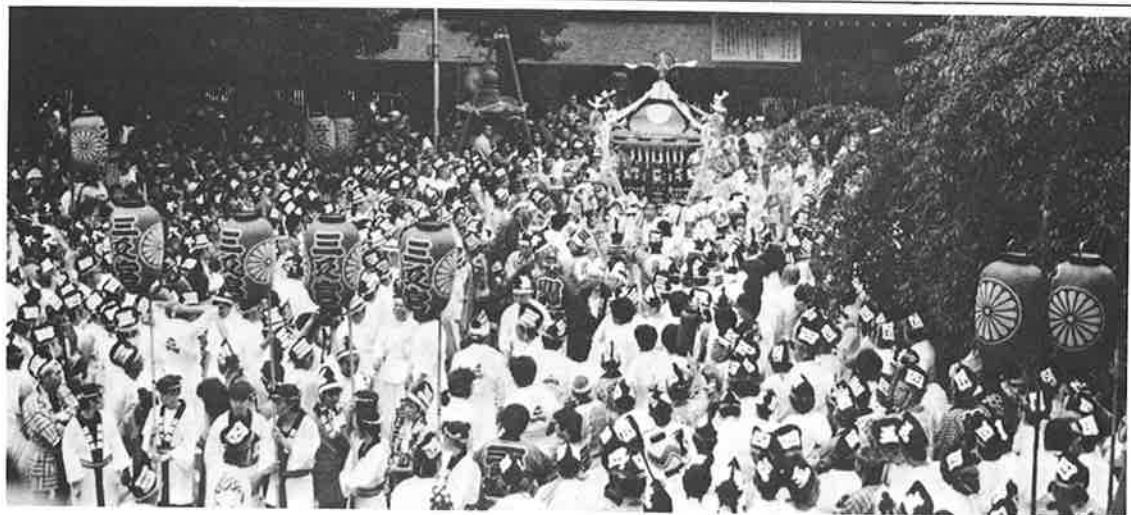
財団だより

多摩川

1986. 3. 第29号



ミヤマアカネ
5～9月山間の川に出現
体は紫銅色翅は褐色
(川名・市田による)



府中大国魂神社五月例大祭（くらやみ祭り）三之宮みこし（写真府中市広報課提供）

■ 多摩川博物誌 ■

⑬ くらやみ祭（府中市宮町大国魂神社）5月5日

府中市の鎮守社^{（鎮守）}大国魂神社の五日の祭を^{（祭）}暗闇祭という。深夜暗黒のうちに祭事を行なうので消灯と静かさが必要とされている。元來神の祭事は、暗い夜に行なうのが原則とされている。これは祀る者も、氏子も物忌みに服した、忌籠^{（忌籠）}から出たもので、昼間に行なうのは後世人間が勝手にきめたことである。暗い夜をさいわいに風紀をみだす傾向があったので、昭和の初めに神輿渡御の際だけ消灯することになった。これは神を迎える儀式だからである。

この神社はむかし六所明神といって、府中の惣社であったが神社階級が国務になったので大国魂神社と改称した。鎌倉時代から源家の崇敬があって有名である。国府のあった土地であるので府中の六所さままで通っていた。惣社というのは国司の者の神拝所であり、六所とはこの付近にある数十

百社の総録社でもあるからである。鎌倉時代には本社のうしろに本地仏の堂が建っていたという。慶長15年（1610）に大久保石見守長安の奉行で宮、楼門、鳥居、末社などの造営があった。家康が死んで遺骸を日光へ遷すときに、この神社が仮安置所になって、一日逗留したという。家康は府中の総社というので天正年代には五百石の神領を寄付しているほどに崇敬をしていた。

くらやみ祭の当日には、神官はじめ関係者は装束屋敷で威儀のある服装に着替えて、神社で神輿に御霊入れをしてから行列を作って六カ所の氏子町を巡る。60貫ほどもある大神輿を氏子は汗だくになって担ぐ。その道筋の家々は、古例にならって灯火を消して神輿を拝む。賽銭は神輿脇についている係の者が、箱をかたいでこれをもって歩く。

この神社には、古式舞のついた祭や、害虫よけの祭などもあって古社の面目を見せている。

「東京生活歳時記」社会思想社・1971

多摩川散歩

● 仏法僧と探鳥のつどい—御岳山

日本野鳥の会奥多摩支部長 大鳥憲太郎

関東平野の西の一角にそびえる御岳山(標高 929m)は秩父多摩国立公園の表玄関に位置し、奥多摩地方では最も古い霊峰として知られている。

御岳山は、関東の、というより日本でも有数の野鳥の生息地として知られており、とくに初夏ともなると、毎年「声の仏法僧」といわれるフクロウの仲間、コノハヅクが渡来し、夜になると「ブツ、ポウ、ソウ」と独特の鳴き声を聞かせてくれる。夜を通しての、コノハヅクの声を聞く探鳥も、御岳山ならではのものである。

植物、昆虫も生息数、種類数とも豊富で、秋の夜には、初夏のコノハヅクに代って、カンタンの鳴き声山々に聞かれ、秋の夜長を退屈させることなく、楽しませてくれる。

交通は青梅線御岳駅から滝本までバス12分、滝本からケーブルに6分ほど乗ると、または滝本から歩くと1時間。御岳山駅前には藤棚を配した半円形の広場があり、土産物屋、休憩所が並ぶ。

ここは、遠くは日光連山、筑波山、そして新宿副都心の高層ビル群といった関東平野一門を望むことができる所で、夏であればアマツバメが迎えてくれる。ここから西の富士峰山頂まではチェアーリフトがかかっており、上にはリフトパーラー、お座敷大観荘があって、脚下の眺めがよい。背後は杉の茂る富士峰公園で、そこから北西へ15分ほど歩くと、大塚山展望台があり、芝生におおわれた山頂からは、直接御岳神社へ通ずる道がついている。

御岳山駅から15分ほど歩いた御岳神社周辺は、旅館やみやげもの店が集まっている所で、キセキレイ、ホオジロ、カラ類などが留鳥としてすみついている。冬はカラ類の群れ、ゴジュウカラ、カシラダカ、シロハラ、アトリ、ルリビタキなどが見られる。

御岳神社から長尾平を経て、奥御岳溪谷、天狗

岩、綾広の滝などを巡ってくる代表的なコースでは、オオルリ、キクイタダキ、センダイムシクイなどの森林性の鳥たちの美しいさえずりであふれる。

さて標題の「仏法僧と探鳥のつどい」では毎年5月の最後の土曜日から日曜日にかけて開催される。夕方7時よりビジターセンターにおいて講演会があり、その後大鳥居前広場での参加者だけの野外パーティーがあり楽しいひとときを過します。

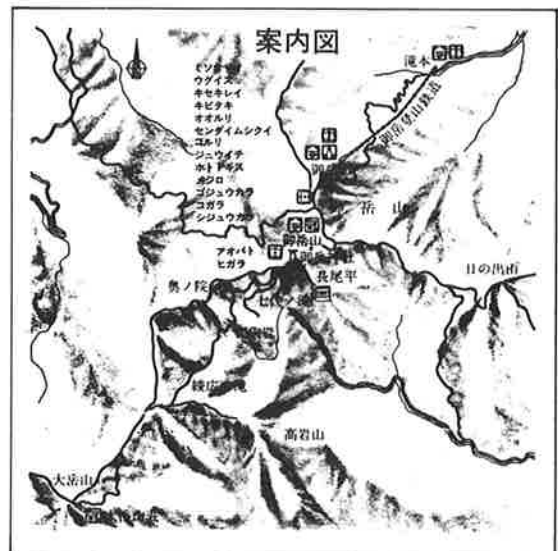
そのパーティー終了後、希望者のみで長尾平に歩を運んで仏法僧の声を聞きます。

最近では、都内はもとより、遠くは神奈川県、千葉県、埼玉県、山梨県からも参加される方も多くなっています。

翌朝午前5時から前記のコースを巡り探鳥を行います。早朝の御岳山の快適さは文筆に表すことのできないよさがあります。

旅館に戻っての朝食、神社拝殿にて都の指定無形民俗文化財になっている太々神楽を見学してから解散となる。

参加照会は、青梅市役所内観光協会(電話0428-22-1111)へ、また参加者は懐中電灯や天候によっては雨具も必要となります。



私と多摩川



現在の等々力緑地公園付近の多摩川
砂利舟、舟上の右が筆者（大正9年）

元川崎郷土研究会長 小林英男

川崎市にとって多摩川は生みの親、二ヶ領用水は育ての親といわれているが、私もその恩恵に俗して84年、中学時代築地明石町にあった立教中学寄宿舎にいたが、やはり多摩川の水の世話になる。

三右衛門河岸のこと

私の生家、昔の小杉村は芝増上寺の御霊屋料が大部分を占め、これを支配する名主安藤家の御用を承り多摩川を下り羽田沖を経て芝浦まで、この上納米を積み込んだのがサンエムガシである。今は西丸子小学校の少し上流になるが、もとは我が家の所有地であったが農地開放と等々力緑地公園に買収され跡を残すのみ。昔はここが多摩川の本流であった。

三右衛門は襲名3代に及び、次が祖父の三左衛門で嘉永4年生れ。祖父は二ヶ領用水の功労者であった。明治維新後地祖改正に当り、戸長役場の村用係となり土地の一筆調査に従事し、今の土地台帳の基本を作成した。また、明治31年稲毛川崎二ヶ領普通水利組合ができると、その組合会議員に選ばれ常設委員となり、大正末期まで勤続し、昭和6年80才で没した。

玉川銀行のこと

明治33年創立。多摩川を挟んで中原小杉、御幸村上平間、東京府側には馬込村千束、調布村上沼部、玉川村用賀、等に店舗があり、父正男（明治

9年生れ）が勤務し、自転車で東奔西走したが大正6年早逝した。

さて、私は明治35年生れだが当時勿論水道はなく、二ヶ領の水で産湯を使った。古い家には井戸はあったが多摩川の地下水で水量は少なく貴重で炊飯用のみ。雑用水は二ヶ領用水の支流である小川で、中にはこの小川で米をとぐ家もあり、夕方、農家はこの小川で肥桶を洗う、子供は夏になるとたらい盥船をして遊んだものだ。

川崎堀、今の高津区久地に分量樋があり、昭和6年に近代式な円筒分水に改造されたが、この本流が通称川崎堀。中原街道と交叉する処に神地橋があり、少年時代近くの少年少女が皆ここで泳いだ。丁度よい水泳場で橋の欄干から飛び込むこともできた。近くの泉沢寺ではよく組合の会合が行われた。鉄道のない時代、丁度中間地点であったためか。

少年達も上級になると多摩川で泳いだ。小杉の河原は川幅も広く障害物もなくよい場所で、近くに杉林もあり、中学小学校教員時代（大正8、9年頃）夏になると、ここで林間学校を開いた。

大多摩川愛桜会が昭和4年春、藤川崎市長、安藤中原町長、天明東調布町長等の提唱で設立され両岸10里に桜を植えることを計画した。中原地域では私が町の助役になってから昭和5年4月に植樹した。今、東横線多摩川園前浅間神社鳥居の右手に愛桜の碑がある。鳥居の左手には更に大きな多摩川治水記念碑がある。

昭和8年中原町が川崎市に合併し、私は市の勧業課農林係長を拝命したが、東京市から小河内ダム建設の申入れがあり、二ヶ領組合の役員を動員し、県当局の協力を得、最後には円満解決し、上下取入口の堰堤工事、円筒分水等が完成した。

多摩川の花火の始まりは二子の河原で玉電、丸子は、大正13年丸子園ができてから園主大竹氏が、郷里参州から花火師を呼んだのが始まりで、これに東横電鉄がのり、一時は日本一といわれ、僕等は青年団役員として警備に動員されたが、やがてこれが、川崎市制記念大花火となる。

よみがえ

甦れ！多摩川

●多摩川をめぐる二つの記事

山道省三

昨年12月19日読売新聞は、「清流多摩川、10年で」という見出しで、建設省が多摩川流域の下水道整備に重点的に事業費配分を決めたと報じた。記事によるその理由は、多摩川の汚濁を食い止めるため下水道の完備が先決であり、建設省としてはこれから10年、重点的に下水道整備を促進させて、日本の都市河川のモデルともいべき多摩川を環境を良くすることによって、全国の河川浄化対策に活気を与えるものとしている。そして、同時に建設省都市局下水道部内に「多摩川浄化推進班」を設け、自治体や住民と協力しあい水質だけでなく環境全般についても対策を進めようとしている。

一方、この記事に遅れることひと月、1月21日の読売新聞の夕刊は、トップで「多摩川サミット7月上旬に開催」との情報を伝えた。この多摩川サミットとは、建設省、環境庁といった国、東京都や神奈川県、流域自治体の首長、学識経験者、住民代表、それにテムズ川やハドソン川、セーヌ川など河川浄化に取りくむ外国都市の首長らも招き、多摩川の浄化対策を話しあおうというものである。

この二つの記事を読むうちに、多摩川の水質汚濁が顕在化してすでに四半世紀たつこと、ようやく何か問題の核心の部分が動き始めたこと、動き始めるための機はすでに充分熟していたことなどが頭を一瞬よぎった。下水道の完備と多摩川サミットといういわゆるソフトとハードがセットになって時期を同じくして出てきたことにある種の光明みたいなものを感じたのは私だけではないだろう。多摩川の幹線部を直接管理する建設大臣によって発案された多摩川サミットにしても、都市局が窓口となって準備を進めるといえるが、いずれ河川局やその他の部局との共同企画ということになっていくであろうし、環境庁や自治体も参加するとすれば、下水道整備の件もあわせて、国が直接

行う「多摩川環境回復モデル事業」といえなくもない。

行政主導の多摩川浄化計画については、昭和45年東京都が発表した「多摩川総合浄化計画」がある。(多摩川'81,1981年に詳録)これは当時、10年かけて10年前の清流を取り戻そうという極めて明解な行政計画であり、その対策の基幹となるのはやはり流域の下水道整備であった。ところがこの計画は整備費用の高騰などがあってとても100%の整備率には至らず、前提条件が満足されないまま今日に至っている。そしてこの計画についてはいくつかの問題点が指摘されたままでもあったのである。その問題とは前述の多摩川'81で加藤迪氏が指摘した下水道の整備と水質・水量との関係である。下水道の整備によって生下水が直接流れ込むことはなくなっても、大量の処理水が放流されることになる。多摩川の自然水のおよそ半分が羽村から取水されている事を考えると、それ以降の多摩川は下水処理水の川となってしまう。そして処理水の水質が現状のままでは悪化することはないにせよ決して清流とは成り得ないだろうという指摘である。この事は都立大学の半谷教授も同様に指摘している(多摩川'84)。¹⁾従って、下水道の完備だけでは問題が全て解決しない事を十分に認識しておく必要がある。

多摩川サミットがどのようなテーマで推められるのか今後の様子を見ないとわからないが、多摩川に関する議論は、住民団体や自治体のシンポジウムや研究会を通して総論の時期はすでに終わった。このサミットに期待することは、多摩川に本当に豊かできれいな水が流れるようにするには下水道の整備にあわせて何をなすべきかの議論である。極端な言い方をすればその事だけで他の事はどうでもいいとさえいえよう。国が本腰になって事業を行う以上、決して勉強会で終ることのないよう望みたいと思う。

財団の事業紹介

「環境回復援助事業」について

財団は研究に対する助成事業のほかにさまざまな事業を行っています。図に示してありますように主に四つの事業から成り立っていますが、その中のひとつ「環境回復援助事業」は、多摩川に関係する団体やグループが多摩川的环境回復を目的に行う催物などに対して直接・間接に援助を行うとする事業です。これまでの実績からその内容を具体的に紹介しますと次のようになります。

- ①官民を問わずある団体が催す展示会、会合などに財団所有の資料・写真・パネル等の貸与、

または提供

- ②講習会、シンポジウムなどに対する企画・構成についての協力または講師の紹介
 - ③催物の開催に係る費用の協力
- などです。

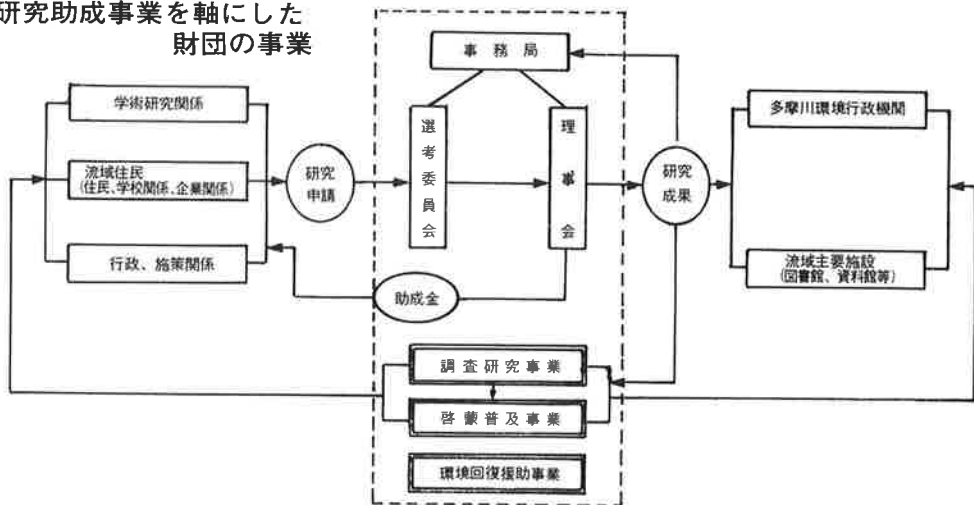
来年度からは財政の充実を図りながらより多くの方々に援助していきたいと考えています。

この援助事業に対するお問い合わせは具体的な企画をご用意のうえ事務局までご連絡下さい。

● 現在までの「環境回復援助事業」

- 昭和54年7月 朝日新聞社主催「野鳥と人間展」(会場・東急百貨店本店6階特設会場)の多摩川コーナー開設にあたり展示資料を提供し協力した。
- 昭和58年3月 川崎市青少年科学館・展示室の「多摩川・その姿」コーナー開設にあたり、内容の相談、展示資料の提供等協力した。
- 昭和59年2月 川崎市教育委員会中原市民館主催・市民大学講座「多摩川のよみがえりを！」の企画構成に協力及び講師を推薦した。
- 昭和59年8月 大田区立多摩川図書館主催「多摩川環境展」の企画構成に協力及び展示資料の提供並びに講師を推薦した。
- 昭和60年2月 川崎市教育委員会中原市民館主催・市民大学講座「水一川との共生を中心に」の企画構成に協力及び講師を推薦した。
- 昭和60年11月 世田谷区・東京都主催「オ3回河川シンポジウム」(於、東京農業大学グリーン・アカデミー)を後援した。協力金支援及び多摩川'85(総集編、資料編)各200部を提供した。

● 研究助成事業を軸にした財団の事業



選考委員紹介

財団は昨年5月理事会において選考委員の改選を行い下記8名が選任されましたのでご紹介いたします。なお、選考委員の互選によりまして沼田委員が選考委員長に選任されました。

●沼田 眞

生年月日 大正6年11月27日生
最終学歴 昭和17年 東京文理科大学生物学科卒業
現職 千葉大学理学部名誉教授
専門 生態学
主な著書 生態学方法論(古今書院)、自然保護と生態学(共立出版)、生態学辞典(築地書館)、環境教育論(東海大学出版会)

●篠原 三代平

生年月日 大正8年10月26日生
最終学歴 昭和17年 東京商科大学卒業
現職 国際商科大学商学部教授
専門 経済学
主な著書 日本経済の成長と循環(勁草書房)、個人消費支出(東洋経済)、産業構造論(筑摩書房)、経済大国の盛衰(東洋経済)

●半谷 高久

生年月日 大正9年12月8日生
最終学歴 昭和17年 東京帝国大学理学部卒業
現職 東京都立大学理学部名誉教授
専門 地球化学
主な著書 水質調査法(丸善)、社会地球化学(紀伊國屋書店)、水質汚濁研究法(丸善)

●西川 喬

生年月日 大正11年6月26日生
最終学歴 昭和19年 東京帝国大学第一工学部土木工学科卒業
現職 むつ小川原開発(株)専務取締役
専門 河川工学
主な著書 治水長期計画の歴史(水利科学研究所)、水資源開発(山海堂)、河川管理の理論と

実際(山海堂)

●石毛 直道

生年月日 昭和12年11月30日生
最終学歴 昭和38年 京都大学文学部史学科卒業
現職 国立民族学博物館助教授
専門 文化人類学
主な著書 住居空間の人類学(鹿島出版会)、環境と文化—人類学的考察(日本放送出版協会)、食事の文明論(中央公論社)

●中村 良夫

生年月日 昭和13年4月3日生
最終学歴 昭和38年 東京大学工学部卒業
現職 東京工業大学社会工学科教授
専門 景観工学
主な著書 土木空間の造形(技報堂)、風景学入門(中央公論社)

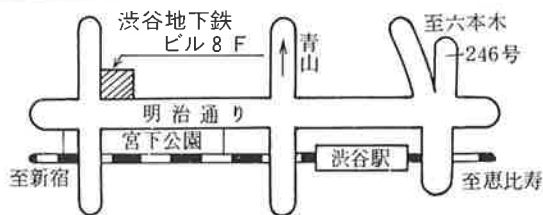
●涌井 史郎

生年月日 昭和20年11月22日生
最終学歴 昭和43年 東京農業大学農学部中退
現職 (株)石勝エクステリア代表取締役
専門 造園学
主な著書 都市の庭(ビック社)

●新井 喜美夫

生年月日 昭和2年10月1日生
最終学歴 東京帝国大学経済学部卒業
現職 財とうきゅう環境浄化財団専務理事
専門 経済学
主な著書 市場調査(日本事務能率協会)、マーケティング入門(東洋経済)、経営戦略の革新(東洋経済)、現代を読む本(東洋経済)

- 発行日 昭和61年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125